

岩手県盛岡市方言の動詞否定・使役・ 受身形における母音無声化規則・ 語中子音有声化規則の音声文法的考察

齋 藤 孝 滋

キーワード 語中子音有声化 母音無声化 動詞 否定形 使役形 受身形 語幹統一

1. 目的

北奥羽方言太平洋側内陸部に位置する岩手県盛岡市の方言には、他の多くの岩手方言（加藤1969、小松代1976、柴田1962、1988、本堂1979、1982、森下1982、平山他1992、齋藤2001e、2002b等）と同様に、母音無声化現象（齋藤1992b、2000）と語中子音有声化現象（井上1968、1980、1984、2000、上野1973、加藤1975、齋藤1987、1990、1991、1992a等）がみられる。

これらの現象は、極めて規則性が高いものであるが、動詞・形容詞の特定の活用形において、例外傾向を示すヴァリエーションが安定して現れることがある（齋藤2001a、c、d、2002a、b、2003a、b）。

そして、この例外傾向を示すヴァリエーションについては、従来、井上（前掲論文）、上野（前掲論文）、齋藤（1987、1990、1991、1992a等）において、語中子音有声化現象の音韻論的解釈の目的で個別的に論じられてはいるものの、活用形ごとに、関わる語について具体的・総合的に生成メカニズムを推定しようとする文声文法的研究の取り組みは、管見には入っておらず、齋藤（2001a、c、d、2002a、b、2003a、b）によって、本格的に始まった段階にあると言える⁽¹⁾。

本稿の目的は、盛岡市方言の動詞否定・使役・受身形においてみられる母音無声化現象、語中子音有声化現象の例外的な傾向について、具体的ヴァリエーションを提示し、各について規則適用メカニズムを推定し、例外的実例の生成要因を、音声文法論的視点から明らかにすることにある。

2. 方法

informantは、調査地生え抜きの岩持文江氏（1907年生）である^②。調査は、1985年3～4月、8～9月に、音韻・動詞・形容詞等の記述的研究の目的で、筆者が盛岡市内の自宅を訪問して実施したが、本稿で用いる資料はその際に得られたものの一部である。

調査方法は、「当該地域出身の親しい友人（同性）とくつろいで話す場面」を設定した上で、まず共通語の例文を示して対応する方言パターンを発話して頂き、次にそれにより見出された接続形式を用いて活用表現を発話して頂くかたちで行った。発話は、すべてカセットテープに録音し、後で確認した。

3. 動詞の種類

盛岡市方言の動詞は、不変化部（語幹）の末尾が子音音素をもつもの（Ⅰ類：C語幹動詞）と、母音音素をもつもの（Ⅱ類：V語幹動詞）、語幹が交替するもの（Ⅲ類：強変化動詞「来る」）に分けることができ、Ⅰ類、Ⅱ類の動詞は、その末尾音素によって、さらに細分類される。盛岡市方言の動詞の分類を示すと次のようになる^③。

(1) 動詞の分類

Ⅰ類：C語幹動詞	{	<1> g ₁ /kigu/ (聞く)
		<2> g ₂ /egu/ (行く)
		<3> ɒ /koɒu/ (漕ぐ)
		<4> z /tazu/ (立つ)
		<5> s /su/ (する) /korosu/ (殺す)
		<6> r /toru/ (取る)
		<7> n /sunu/ (死ぬ)
		<8> m /jomu/ (読む)
		<9> ~b /to~bu/ (飛ぶ)
		<10> w /omo'u/ (思う) ^⑤
		<11> k /kuu/ (食う)
Ⅱ類：V語幹動詞	{	<1> i /niru/ (似る)
		<2> u /ozuru/ (落ちる)
		<3> e /nagareru/ (流れる)
		<4> ɛ /kaNɔ̃ɛɾu/ (考える)
Ⅲ類：強変化動詞	—	ku~ki~ko/kuru/ (来る)

4. 活用

ここでは、否定形・使役形・受身形について、4・1～4・3で具体的に分析対象として又は類推比例式等で取り上げるヴァリエーションを音韻表記（上段）・音声表記（中段）・意味（下段）の形式で提示する。

4・1. 否定形

否定形は、否定の助動詞/*n ε ε*/（ない）が接続する場合の活用形である。

(2) C語幹動詞「行く」

'eganeε

[igan ε']

（行かない）

(3) C語幹動詞「聞く」

kiganeε

[k^h i ganε']

（聞かない）

(4) V語幹動詞「見る」

mineε

[m i n ε']

（見ない）

(5) V語幹動詞「着る」

kinεε

[k^h i n ε']

（着ない）

(6) V語幹動詞「起きる」

'ogineε

[og^h i n ε']

（起ない）

4・2. 使役形

使役形は、使役の助動詞/*seru/*（せる）、/*raseru/*（させる<ラセル>）が接続する場合の活用形である。

(7) C語幹動詞「行く」

'egaseru

[ɪg as ɛ r ü]

(行かせる)

(8) C語幹動詞「聞く」

kigaseru

[k^ɕ i gas ɛ r ü]

(聞かせる)

(9) V語幹動詞「見る」

miraseru

[m i r as ɛ r ü]

(見させる)

(10) V語幹動詞「着る」

kiru

[k^ɕ i r as ɛ r ü]

(着させる)

(11) V語幹動詞「起きる」

'ogiraseru

[og^ʒ i r as ɛ r ü]

(起きさせる)

4・3. 受身形

受身形は、受身の助動詞/reru/ (れる)、/rareru/ (られる)⁽⁴⁾が接続する場合の活用形である。

(12) C語幹動詞「行く」

'egareru

[ɪga r ɛ r ü]

(行かれる)

(13) C語幹動詞「聞く」

kigareru

[k^ɕ i ga r ɛ r ü]

(聞かれる)

(14) V語幹動詞「見る」

mirareru

[m̥i r a r ɛ r ũ]

(見られる)

(15) V語幹動詞「着る」

kirareru

[k̥i r a r ɛ r ũ]

(着られる)

(16) V語幹動詞「起きる」

'ogirareru

[oɡ̊i r a r ɛ r ũ]

(起きられる)

5. 「母音無声化規則」と「語中子音有声化規則」について

5・1. 母音無声化規則

盛岡市方言における「母音無声化」は、齋藤 (1992b, 2000) によれば、一般に、(17)音構造1の「 \underline{V}_N 」には生ずるものの、(18)音構造2の「 \underline{V}_N 」には生じない。これらを規則化すると(19)母音無声化規則のように示することができる (C_\circ :無声子音、 \underline{V} :有声母音、 V_\circ :無性化母音、 V_N :狭母音、 $V_{M\cdot w}$:半広及び広母音、以下同様である)⁵⁾。

(17) 音構造1「 $\text{C}_\circ + \underline{V}_N + \text{C}_\circ + V_{M\cdot w}$ 」

(18) 音構造2「 $\text{C}_\circ + \underline{V}_N + \text{C}_\circ + V_N$ 」

(19) 母音無声化規則 「 $\underline{V} \rightarrow \text{V}_\circ / \text{C}_\circ - \text{C}_\circ + V_{M\cdot w}$ 」

5・2. 語中子音有声化規則

「語中子音有声化」は、齋藤 (1992a) によれば、「中央語の語中の無声子音音素/k/,/c/,/t/に、それぞれ方言の有声子音音素/g/,/z/,/d/が対応している現象」であり、有声母音には含まれた環境で生ずる。

この中央語と盛岡市方言の対応による比較方言学的視点により、「中央語の語中の無声子音音素」が盛岡市方言の「過去音形」として推定されることとなる⁶⁾。「語中子音有声化」をこの「過去音形」からの変化規則として規則化すると、(20)「語中子音有声化規則」のように示することができる。

(20) 語中子音有声化規則 「k,c,t → g,z,d / \underline{V}_\circ ____ \underline{V}_\circ 」

なお、語中子音有声化規則は、有声母音にはさまれた環境「 $\dot{V} ______ \dot{V}$ 」で適用され、無声化した母音と隣接する環境では適用されない。即ち、㉔語中子音有声化規則と㉓母音無声化規則は、背反する規則であり、同時に適用されることはない。

6. /kigu/ (聞く) の否定形・使役形・受身形語幹における「母音無声化規則」と「語中子音有声化規則」、及び「語幹統一の類推」の影響関係について

6・1. C語幹動詞「聞く」の否定形/kiganεε/における「母音無声化規則」「語中子音有声化規則」及び「語幹統一の類推」の適用—「きかん気だ」の/kikanεε/と対比しつつ—

ここでは、㉗音構造1を持つ「聞く」の否定形音形に対する、「母音無声化規則」「語中子音有声化規則」の適用パターンについて、同様の過去音形を持つと推定される「キカネアー (きかん気だ)」、及び㉘音構造2を持つ「聞く」の終止形音形と対比しながら検討する。

これらの音形について、母音無声化規則、語中子音有声化規則の適用パターンについてまとめると、次の㉙のようになる。なお、煩雑さを避けて、ここでは、問題にならない音声要素については、現在のパターンでしめすこととする。

㉙ 「聞く」の終止形、否定形、キカネアーに関する規則適用パターン

	聞く<終止形>	キカネアー(きかん気)	聞かない<否定形>
	通常の規則適用実例	通常の規則適用実例	例外的な規則適用実例
音構造	2	1	1
設定される過去音形	*k ^㉚ i k ü	*k ^㉚ i k an ε'	*k ^㉚ i kan ε'
母音無声化規則	<適用せず>	k ^㉚ i k an ε'	<適用せず>
語中子音有声化規則	k ^㉚ i g ü	<適用せず>	k ^㉚ i gan ε'
結果<音声レベル>	k ^㉚ i g ü	k ^㉚ i k an ε'	k ^㉚ i gan ε'
結果<音韻レベル>	/kigu/	/kikanεε/	/kiganεε/

「聞く<終止形>」の場合は、音構造2であることから、母音無声化規則が適用されず、従って語幹末尾子音(過去音形の[k])に語中子音有声化規則が適用されることとなる。これについては、通常の規則適用であるといえる。

「キカネアー<きかん気だ>」の場合は、音構造1であることから、母音無声化規則が適用されるため、語幹末尾子音に語中子音有声化規則は適用されない。これについても、通常の規則適用であるといえる。

「聞かないく否定形」の場合は、前述のキカネアーくきかん気だ」と同様の音構造であることから、母音無声化規則が適用され、語幹末尾子音に語中子音有声化規則が適用されないことが期待されるが、実際は、例外的に、母音無声化規則が適用されず、語中子音有声化規則が適用される結果となっている⁽⁷⁾。

その要因を推定する上で重要なのが、「語幹の音形」のヴァリエーションの種類である。母音無声化がかかわらない多くの語において、当然のことながら語幹の音形は一種類である⁽⁸⁾。

「聞く」の語幹は、基本形である終止形・連体形・準体形で /kig/ であるが、仮に否定形が「通常の規則適用」となる場合は /kik/ となり、末尾子音に異なる音素 /g/、/k/ の交替がみられることとなり複雑化する。しかし、「例外的な規則適用」の実例の場合は、結果として、否定形ともに /kig/ となり、語幹が統一されるのである。

以上より、「例外的な音規則適用」を生じさせる要因として「語幹を統一する力」が想定されるわけである。

この語幹統一のメカニズムを、類推比例式で示すと図10のようなになる。

図10 否定形における語幹統一の類推比例式

$$\begin{aligned} I_g - \ddot{u} : I_g - a (-n \varepsilon') &= k^C i_g - \ddot{u} : x \\ x &= k^C i_g - a (-n \varepsilon') \end{aligned}$$

6・2. C語幹動詞「聞く」の使役形/kigaseru/、受身形/kigareru /と、「母音無声化規則」「語中子音有声化規則」及び「語幹統一の類推」の適用

ここでは、図11音構造1を持つ「聞く」の使役形と受身形の音形に対する、「母音無声化規則」「語中子音有声化規則」の適用パターンについて、図12音構造2を持つ「聞く」の終止形音形と対比しながら検討する。

これらの音形について、母音無声化規則、語中子音有声化規則の適用パターンについてまとめると、次の図13のようなになる。

図13 「聞く」の使役形、受身形に関する規則適用パターン

	×聞かせる 通常の規則適用架空例	○聞かせる 例外的な規則適用実例	×聞かれる 通常の規則適用架空例	○聞かれる 例外的な規則適用実例
音構造	1	1	1	1
設定される過去音形	*k ^C ikaseɾ ũ	*k ^C ikaseɾ ũ	*k ^C ikaɾeɾ ũ	*k ^C ikaɾeɾ ũ
母音無声化規則	k ^C ɪkaseɾ ũ	<適用せず>	k ^C ɪkaɾeɾ ũ	<適用せず>
語中子音有声化規則	<適用せず>	k ^C i gaseɾ ũ	<適用せず>	k ^C i ɾeɾ ũ

結果<音声レベル>	$k^{\text{C}}_{\text{ĩ}}kase_{\text{r}}\ddot{u}$	$k^{\text{C}}_{\text{ĩ}}gase_{\text{r}}\ddot{u}$	$k^{\text{C}}_{\text{ĩ}}ka_{\text{r}}e_{\text{r}}\ddot{u}$	$k^{\text{C}}_{\text{ĩ}}ga_{\text{r}}e_{\text{r}}\ddot{u}$
結果<音韻レベル>	/kikaseru/	/kigaseru/	/kikareru/	/kigareru/

「聞かせる<使役形>」、「聞かれる<受身形>」の場合は、音構造1であることから、母音無声化規則が適用され、語幹末尾子音に語中子音有声化規則が適用されないことが期待されるが、実際は、例外的に、母音無声化規則が適用されず、語中子音有声化規則が適用される結果となっている。

その要因を推定する上で重要なのが、否定形の場合と同様に「語幹の音形」のヴァリエーションの種類である。

母音無声化がかかわらない多くの語において、当然のことながら語幹の音形は一種類であった^㉑。

「聞く」の語幹は、基本形である終止形・連体形・準体形で/kig/であるが、仮に使役形・受身形が「通常の規則適用」となる場合は/kik/となり、末尾子音に異なる音素/g/、k/の交替がみられることとなり複雑化する。しかし、「例外的な規則適用」の実例の場合は、結果として、否定形とともに/kig/となり、語幹が統一されるのである。

以上より、使役形・受身形の場合も、先に述べた否定形と同様に「例外的な音規則適用」を生じさせる要因として「語幹を統一する力」が想定されるわけである。

この語幹統一のメカニズムを、類推比例式で示すと㉒、㉓のようになる。

㉒ 使役形における語幹統一の類推比例式

$$\begin{aligned} I_{\text{g}} - \ddot{u} : I_{\text{g}} - a (-s_{\text{e}} \ddot{u}) &= k^{\text{C}}_{\text{ĩ}} g - \ddot{u} : x \\ x &= k^{\text{C}}_{\text{ĩ}} g - a (-s_{\text{e}} \ddot{u}) \end{aligned}$$

㉓ 受身形における語幹統一の類推比例式

$$\begin{aligned} I_{\text{g}} - \ddot{u} : I_{\text{g}} - a (-r_{\text{e}} f \ddot{u}) &= k^{\text{C}}_{\text{ĩ}} g - \ddot{u} : x \\ x &= k^{\text{C}}_{\text{ĩ}} g - a (-r_{\text{e}} f \ddot{u}) \end{aligned}$$

7. V語幹動詞/ogiru / (起きる) の否定形・使役形・受身形語幹における「母音無声化規則」と「語中子音有声化規則」、及び「語幹統一の類推」の影響関係について

7・1. V語幹動詞「起きる」の否定形/oginεε /、受身形/ogirareru/と、「母音無声化規則」「語中子音有声化規則」及び「語幹統一の類推」の適用

「起きる」の否定形、受身形の設定される過去音形は、㉗音構造1にも㉘音構造2の構造のいずれでもない㉙のような構造を持つ。

㉚ 音構造3 「V + C₀ + V_N + C₀ + V_{M-w}」

これらの音形について、母音無声化規則、語中子音有声化規則の適用パターンについてまとめると、次の⑦のようなになる。

⑦ 「起きる」の使役形、受身形に関する規則適用パターン

	○起きる<終止形> 通常の規則適用実例	○起きない<否定形> 通常の規則適用実例	○起きられる<受身形> 通常の規則適用実例
音構造	3	3	3
設定される過去音形	*ok ^h i r ü	*ok ^h i n ε'	*ok ^h i r a r ε r ü
母音無声化規則	<適用せず>	<適用せず>	<適用せず>
語中子音有声化規則	og ^h i r ü	og ^h i n ε'	og ^h i r a r ε r ü
結果<音声レベル>	og ^h i r ü	og ^h i n ε'	og ^h i r a r ε r ü
結果<音韻レベル>	/ogiru/	/oginεε/	/ogirareru/

音構造3の「V_N」は、直後に有声子音「C」が位置するため、母音無声化規則は適用されない。従って、音構造3に該当する「起きない<否定形>」、「起きられる<受身形>」の場合は、「V_N」と共に語幹末尾拍を構成する子音に、通常どおり語中子音有声化規則が適用される。即ち、「起きない<否定形>」、「起きられる<受身形>」は、通常の規則適用パターンとなっているのである。

7・2. V語幹動詞「起きる」の使役形/ogiraseru/と、「母音無声化規則」「語中子音有声化規則」及び「語幹統一の類推」の適用

ここでは、⑦音構造1を持つ「起きる」の使役形の音形に対する、「母音無声化規則」「語中子音有声化規則」の適用パターンについて、検討する。

「起きる」使役形の音形について、関連する接続形式の形態変化「saseru>raseru化」を含めながら、母音無声化規則、語中子音有声化規則の適用パターンについて、まとめると、次の⑧のようなになる。

⑧ 「起きる」の使役形に関する規則適用パターン

	×起きさせる 通常の規則適用架空例	○起きさせる 例外的な規則適用実例
音構造	1	1
設定される過去音形	*ok ^h i sas ε r ü	*ok ^h i sas ε r ü
saseru>raseru化	<適用せず>	og ^h i r a s ε r ü

用パターンについて、検討する。

「着る」の使役形の音形について、関連する接続形式の形態変化「saseru>raseru化」を含めながら、母音無声化規則、語中子音有声化規則の適用パターンについて、まとめると、次のようになる。

㊦ 「着る」の使役形に関する規則適用パターン

	×着させる	○着させる
	通常の規則適用架空例	例外的な規則適用実例
音構造	1	1
設定される過去音形	*k ^h i s a s e r ü	*k ^h i s a s e r ü
saseru>raseru化	<適用せず>	k ^h i r a s e r ü
母音無声化規則	k ^h ɨ s a s e r ü	<適用せず>
結果<音声レベル>	k ^h ɨ s a s e r ü	k ^h i r a s e r ü
結果<音韻レベル>	/kisaseru/	/kiraseru/

「着させる<使役形>」の場合は、音構造1であることから、母音無声化規則が適用されることが期待されるが、実際は、接続形式の形態変化「saseru>raseru化」により、音構造が1から3'に変化するため、母音無声化規則が適用されない結果となっている。

以上より、「着る」使役形の場合は、「例外的な音規則適用」を生じさせる要因として、音構造を1から3へ変化させる接続形式の形態変化「saseru>raseru化」が指摘できるのである。ただし、「着る」の語幹の場合は、母音無声化規則のみが関わり、語中子音有声化現象が関わらないことから、音韻レベルでの語幹の統一という問題が生じない点で、先に論じた「起きる」の使役形の場合とは異なる。

9. おわりに

本稿では、同一informant内の言語規則を精密に記述するため、先行研究（橘1932）等との関連については触れなかった。データ比較による資料の位置づけ等については別稿で詳細に論ずることとする。

注

- (1) このタイプの研究の必要性は齋藤（2002a, d）で主張している。
- (2) informantは市内愛宕町で生まれ育っている。
- (3) 当方言の特徴として、共通語及び多くの方言で強変化動詞である*/suru/（する）が、完全にⅠ類：C語幹動詞化している点、Ⅱ類：V語幹動詞の種類が、拍の統合（/zi/>/zu/）により/u/、速

母音融合 (/a/e/ > /ε/) により /ε/ が語幹末尾に生じているため、共通語より 2 種類多い 4 種類となっている点等が挙げられる（齋藤2003）。なお、I 類：C 語幹動詞において <1> g₁/kigu/（聞く）<2> g₂/egu/（行く）を区別しているのは、（共通語の場合も同様であるが、）後者が、音便形において例外的である（活用語尾が他と異なり/Q/となる）ことによる。

- (4) 盛岡市方言の本研究における informant には、他の岩手方言にしばしばみとめられる「r/行拍連続回避」（齋藤2002c）は、みられない傾向にある。
 - (5) 盛岡市方言における母音無声化は、音構造 1 においては、本稿で取り上げるような特別な条件がない場合、ほぼ完全にみられるのに対し、音構造 2 においては、傾向は強いものの音構造 1 ほどではない。これらの傾向については、別の機会に、計量的手法（齋藤2001b）を導入し、より厳密に論ずる予定である。
- なお、母音無声化には、アクセントの問題が関わる場合があるが（齋藤1994）が、本稿で論ずる範囲内では、特に問題とはならない。なお、盛岡市方言のアクセントは、平山（1957）によれば、東京式音調 1 に属する。
- (6) 語中子音有声化生成の歴史的メカニズムについては加藤（1975）、齋藤（1992a）を参照されたい。
 - (7) これにより、両者が minimal pair の関係となるため、当 informant において /g/ とは異なる /g/、/k/ が明らかに認められることとなる。
 - (8)(9) 例えば、/toru/（取る）の語幹は /tor/、/jomu/（読む）の語幹は /jom/ の 1 種類（但し、音便語幹を除く）である。

文献

- 井上史雄 1968 「東北方言の子音体系」『言語研究』53（井上史雄、篠崎晃一、小林隆、大西拓一郎編 1994『日本列島方言叢書 2 東北方言考①（東北一般・青森県）』ゆまに書房、及び井上2000に再録）
- 同 1980 「言語構造の変遷」『講座言語第1巻 言語の構造』大修館書店（井上2000に再録）
- 同 1984 「音韻研究法」『講座方言学 2 方言研究法』国書刊行会
- 同 2000 『東北方言の変遷』秋山書店
- 上野善道 1973 「岩手方言平石町方言の音韻体系」『日本方言研究会第17回発表原稿集』（井上史雄、篠崎晃一、小林隆、大西拓一郎編1994『日本列島方言叢書3 東北方言考②（岩手県・宮城県・福島県）』ゆまに書房に再録）
- 加藤正信 1969 「東北方言概説」『言語生活』210（井上史雄、篠崎晃一、小林隆、大西拓一郎編1994『日本列島方言叢書 2 東北方言考①（東北一般・青森県）』ゆまに書房に再録）
- 同 1975 「方言の音声とアクセント」大石初太郎・上村幸雄『方言と標準語—日本語方言学概説—』筑摩書房
- 小松代融一 1976 『岩手方言の音韻と語法』岩手方言研究会
- 齋藤孝滋 1987 「岩手方言における子音の語中有声化現象の音韻論的解釈について—岩手方言を中心に—」『語文論叢』15
- 同 1990 「岩手方言における語中子音有声化現象—音環境・語彙的事情・世代の観点から—」『国語学研究』30
- 同 1991 「音韻」（加藤正信・村上雅孝・神戸和昭・齋藤孝滋・武田拓・半沢康、「南部・伊達藩境地帯における方言分布の報告と考察」『日本文化研究所研究報告』別巻28号）
- 同 1992a 「岩手方言における語中子音有声化現象・鼻音化現象—言語内の・外的要因の観点か

ら一』『国語学』168

- 同 1992b 「母音無声化の「広さ」と「強さ」—岩手方言を中心に—」『国語学研究』31
- 同 1994 「特殊アクセント方言における音調バラエティーと認知の原理—岩手県一関市舞川方言の名詞を対象として—」『音声の研究』23
- 同 2000 「岩手県方言における母音無声化の変容」『国語学会平成12年度春季大会要旨集』
- 同 2001a 「岩手県一関市方言における形容詞活用体系」『フェリス女学院大学文学部紀要』36
- 同 2001b 「計量日本語学の入門書」『日本語学 4月臨時増刊号日本語の計量研究法』
- 同 2001c 「岩手県久慈市方言における形容詞の活用体系」『都大論究』38
- 同 2001d 「岩手県安代町方言の形容詞活用体系」『言語と人間』5
- 同 2001e 『日本のことばシリーズ3 岩手県のことば』(平山輝男他編) 明治書院
- 同 2002a 「音声研究の歴史」飛田良文・佐藤武義編『現代発音講座3 発音』明治書院
- 同 2002b 「岩手県盛岡市方言の形容詞活用体系」佐藤慈代治編『国語論究9 現代の位相』明治書院
- 同 2002c 「東北・越後方言における/t/をめぐる音変化」『フェリス女学院大学文学部紀要』37
- 同 2002d 「日本方言の音韻」北原保雄監修、江端義夫編『朝倉日本語講座 第10巻 方言』朝倉書店
- 同 2003a 「岩手県盛岡市方言における動詞の所謂終止・連体・準体・禁止・推量志向形と音韻・音声規則」『国学院大学紀要』41
- 同 2003b 「岩手県一関市方言における動詞の所謂終止・連体・準体・禁止形と音韻・音声規則」『フェリス女学院大学文学部紀要』38
- 柴田武 1962 「音韻」『方言学概説』国語学会(柴田武・北村市・金田一春彦1980『日本の言語学第2巻音韻』大修館書店に再録)
- 同 1988 『方言論』平凡社
- 橘正一 1932 「盛岡弁の動詞と形容詞」『方言と土俗』3-1 (井上史雄、篠崎晃一、小林隆、大西拓一郎編『日本列島方言叢書3 東北方言考②(岩手県・宮城県・福島県)』ゆまに書房に再録)
- 平山輝男 1957 『日本語音調の研究』明治書院
- 平山輝男・大野真男・久野真・久野マリ子・杉村孝夫 1992 『現代日本語方言大辞典』明治書院
- 本堂寛 1979 「岩手方言」平山輝男編『全国方言基礎語彙の研究序説』明治書院
- 同 1982 「8 岩手県方言」『講座方言学4 北海道・東北地方の方言』国書刊行会
- 森下喜一 1982 『岩手県の方言』教育出版

付記 長時間にわたり調査にご協力下さり、本稿における資料を含め、多くの音声言語資料を提供して下さった岩持氏に厚く御礼申し上げる。本研究は、日本学術振興会平成12・13年度科学研究補助金奨励研究(A)「全国方言における主要音現象規則の計量的・構造的・社会的・地理言語学的研究」(課題番号12710229)による成果の一部である。

(フェリス女学院大学文学部・大学院文学研究科教授)